

国民に一人一つ割り当てられたデフォルトのメールアドレス。その受信ボックスには、そう滅多にマトモなメールは来ず、どうでもいい政府広報やらお知らせやらが八割、税金の催促が二割。そのメールボックスに不審げな求人が舞い込んできたのは、つい先週のこと。

ああ、とうとう自衛隊からお呼び出しでも頂いたかな。何せもう戦争も四年目だ——たかだか情報システム屋の端くれの私にだって、声がかかることもあるだろう。

そう思っただけで開いたメールは、もっと得体のしれないモノだった。自衛隊ではなく、防衛省所管の団体の名目で、募集する職種は研究施設職員。勤務地は山形県某所の施設内に住み込み、詳細は書かれてない。求められている要項は高校レベルの教員免許のみ。ってことになってるけれど、明らかにその裏には色々ある様子だ。

要項の怪しさ以前に、給料が桁違いだ。教員ってあるけれどたぶん一般的な高校教師の5倍かそこら、今やってる、給料だけで選んだ仕事に比べても2倍近い。

これは余程やばい施設のような気がする。一体何の施設なのか分からないままだったけれど、私は給与とつられてさっくり承諾するメールを返した。

ほんの数日後。私はメールだけで採用を決定され、前の職場に辞表を突きつけ。今は自動運転に任せて車を飛ばしながら、指定され

た住所に向かっていた。

高速道路の終点が近づいてきて、連絡路から一般道に下ろされる。その手前で、自動音声の不穏なことを言った。

《アシストモードに移行しました。三十秒以内に運転操作に移行しないと停止します》

「……うっわ」

今どき高速降りてすぐに自動運転非対応か。薄々予想していたけれど、結構な奥地のようなだ。

車の自動音声相手に悪態を吐いても仕方ない。私はハンドルを少し動かして、車を手動運転に切り替えた。

何度か曲がって国道に出る。海沿いの景色は、如何にも日本海岸だ。

街から外れて建物がなくなってくると、代わりに現れるのは、シーズンオフでフレームだけになった防雪柵。その向こうには海が見える。徐々に迫ってくる山側の崖に、切り立っていく海辺。

夏だから水面はさほど荒れていないけれど、冬なんて想像したくもない。あの街の冬も寒々しかったけれど、ここはもっと北だ。……寒冷地手当とかつかないかな。

国道から脇道に入って、沢を登って行く途中で更に折れるとナビは指示していた。気づかないで一旦通り過ぎ、先の少し広い所でUターン。意識してないと気づかない、木々の合間の舗装も細かい道。

ゆっくりと上って行くと、目の前に閉ざされた門が現れた。守衛さんでもいるのかと思っただけれど、手前で車を止めるも勝手に門が開く。ナンバプレートでも読んでのるだろう。

門の内側は、木々が切り開かれ、少し広い空き地になっていた。広いとはいえ、駐車場は沢の崖下に張り出してようやく七台分確保